

■ フォトエッセイ ■

# インド・ビハール州 楽園のなかの楽園をゆく

写真・文  
辻田 祐子  
Yuko Tsujita

ブッダが悟りを開き、世界最古の大学があった地。ビハール州といえば、そんな過去の栄華ではなく、今日ではま  
ず貧困を思い浮かべる人の方が多いだろう。ブッカー賞  
受賞作 A・アデイガ『グローバリズム出づる処の殺人者  
より』（文藝春秋、二〇〇九）では、経済成長著しいイン  
ドの間としてビハール州農村の貧困、不正、不平等が描  
かれている。しかし、二〇〇五年末に現州政権が就任し  
て以来、経済社会開発が進められ、少しずつ村の生活も  
変わっている。過去二年半ほど同州農村で調査をする機  
会があった。前述書で「楽園のなかの楽園」と諧謔的に  
描かれている村の公立校から変化の一端を紹介しよう。

教室が足りないので、廊下で授業をする風景を農村の小中学校ではよく見かける



州の人口は約8,300万人、人口密度は1平方km当たり880人（2001年センサス）。いずれもインドで  
有数に高い。農村で見かけるバスはどれも屋根まで乗客でいっぱいだ

インド全国にその名を知られる政治家の選挙区を訪ねたときのことである。幹線道路から冬の間に育った収穫間近の小麦畑の間をぬうように入り組んでのびるガタガタ道を数キロ行き、さらに徒歩で土埃の舞う道を十分ほど歩いただろうか。たどり着いたのは、二〇〇世帯ほどからなる部落。そこは、旧不可触民を中心とする指定カーストのなかでも最も後進的といわれるカーストが多く、大雨でも降れば崩れそうな家が並んでいる。破れた服を着た子供たちも多い。部落の小さな集会所は小学校としても使われており、部落出身の大卒の青年が二六〇人の子供たちを相手に孤軍奮闘していた。給食時間には無料のためだろうか、学齢以下の子供も次々と食事によつてくるので大忙しである。当然全員に目配せをできるはずもなく、子供たちは授業などお構いなしに村落中をウロ

ウロしていた―この村落のように、伝統的に学校のなかったところに小学校の設立が進んでいる。子供の性別、学年、カーストに応じて奨学金、制服代金、教科書、通学自転車の支給なども行われている。現在では、学校に登録していない子供は少数派になりつつある。

さて、州政府の学力試験調査隊に同行したときのことである。試験の実施といってもそう簡単ではない。新設校の多くはそもそも校舎さえないからである。こうした学校では選抜された生徒を隔離して試験をする場所がない。調査隊は長い議論の末、近くのバナヤン・ツリーの下に数校の生徒を集合せ、そこで試験をすることにした。

次に向かったのが、生徒は五年生まで、先生は二人、教室は三つの学校。二〇〇九年は過去数十年で最悪の早

新設校には校舎のない学校も少なくない。先生も新規採用者が多い



給食の風景。就学率の向上、栄養水準の改善、平等意識の普及（もともとインドには異なるカーストが一緒に食事をする習慣がなかった）などを目的として全国の公立校で実施されている



8年生までの公立校。もともと5年生までの小学校だったので、4年前から新校舎の建設が続いている。村人の話では、校長が増築費用で自分の家建てたので、工期が大幅に遅れているとのこと



魅で、雨季には道が悪く容易に辿り着けないその学校にも比較的無理なく行けた。だが、連日四〇度前後の気温が続く、厳しい日差しの下での移動に調査隊は疲労困憊の汗をぬぐう。ほとんどの公立校には電気が来ていない。当然、扇風機などない。校舎は夏の遮光性を重視して作られているため多少外より涼しい気もするが、その分教室は薄暗い。机も椅子もないので、床に座って試験を受ける子供たちの手もとにはさらに暗い。

こうしてある郡の全校で実施された試験では、三年生でも自分の名前さえ書けない生徒がいることがわかった。現在、八年生までの義務教育期間中は、学年末試験を受ければ自動的に進級することができる。本来ならば出席率も考慮されるが、しばしば水増し報告される。現場の先生にとっては、郡教育行政官の昇進に影響を与え

るため上からの圧力があるだけでなく、給食予算の獲得がかかっているからである。

ビハール州での給食制度は、他州に大きく遅れて二〇〇五年に始まった。現在までに約四分の三の学校で導入されたという。だが、政府から別々に支給される資金と米の両方が揃った時にしか実施できない。本来ならば P T A が担当するはずの運営管理を先生が行っている学校がほとんどだ。どこの学校にいても教員にとつて給食がいかに重荷であるかを力説された。しかし、例外もある。州の米どころといわれる地域のある学校では、P T A 会長が配膳の陣頭指揮をとっていた。珍しく校門と外壁がある学校で、それだけで普段の P T A 活動の様子が想像できた。

教員には、学校外の任務も少なくない。国勢調査、家畜調査、選挙、配給制度の名簿づくりへの協力など、村



教室内で給食を食べる子供たち。電気のまている公立校は少なく、教室内は薄暗い



村長の弟が校長に就任し、村長宅の一部を小学校として使っていた学校。毎年洪水被害にあう州北東地域では富裕層でも家屋は粗末な家が多い



給食調理の様子。コックとして村人が雇われている。こうした調理場があるのは3割の学校にすぎなかった。NGOに給食運営を委託している地域もある

1人の先生が複数の学年に授業をする学校は多い。さらに、この学校では、ひとつの教室内でこちら側を向く2学年と向こう側を向く2学年の計4学年が授業を受けている



आज की उपस्थिति			
वर्ग	कुल नामांकित	बच्चों की संख्या	उपस्थिति
I		50	39
II		142	87
III		89	52
IV		24	15
V		27	19
योग		332	212

  

विद्यालय में कार्यरत कुल शिक्षक/शिक्षिका	8
उपस्थित शिक्षक/शिक्षिका	8
बच्चों की उपस्थितिका प्रतिशत	63.85

毎日、生徒と先生の出席人数が壁に書き出される学校を多く見かけた。しばしば批判的となる先生の欠勤より、実は生徒の欠席率の方が高い。男女では女子の出席率が高い傾向がみられた

ネパール国境に近い村の私立校。どんな辺境の村でも富裕層を中心（とくに上位カーストと男子）に私立校通学者がいる



人に最も近い公的機関として学校はさまざまな役割を担っている。州政府は教員の授業時間が削られている事態を重く見て、原則的に教育以外の任務を禁止している。しかし、それが守られているふしはない。近年、州政府採用の教員よりも低い給料で、年金や医療保険などの手当のない教員の採用が郡や村レベルで行われている。バングラデシュ、ネパールの両国国境まで数十キロの村を訪ねた時のことだ。翌週に州首相の視察を控え、急ピッチで受け入れ準備が進んでいた。村長宅に電気が通り、学校には校門、外壁、屋外の給食調理場ができ、校舎はペンキ塗りたての状態である。教員の採用も駆け込みで済ませ、たった二人の枠に二二〇〇人も応募があったと、読み書きのできない女性村長に代わって実質村長の夫は



州都から40kmほど北に位置する私立校。公立校との施設、授業内容の違いは明らかであった。生徒も全員制服を着ている

次々と携帯で電話をかけながら忙しそうに答える。教員の採用が村で行われるようになり、試験で採用されたはずの教員が村長の親族という例は少なくない。なかには村人が一度もその姿を見たことのない教員もいた。地方分権化や現州政権の経済社会開発の積極的な推進により、村での開発資金は明らかに増えた。また、開発プログラムの受益者も明らかにされるなど村レベルでの透明性も増した。その分、草の根レベルの汚職が増え、それが一層見えやすくなったという声も聞く。それでも「楽園のなかの楽園」は少しずつ変わっている。今年も州議会選挙の年である。「楽園」の住民は、現政権をどう評価するのだろうか。 (つじた ゆうこ/アジア経済研究所南アジア研究グループ)